

## ふしぎなラムネ

瀬戸内町立西阿室小学校二年 いのり ひとえ

わたしの名前はつばさ。八さいの女の子。一しゅう間前に、海のすぐそばにあるまっ白な家にひっこしてきたばかり。夏休みが終わって二学期からは、新しい学校に転校しないといけない。友達にはできるかな。毎日楽しく学校に通えるかな。もうすぐ二学期が始まると思うと、少しドキドキしてきた。

「うわあ、なんてきれいな色なの。海の色と同じだ。」  
つばさは、すなはまにおちていた青色のラムネを親ゆびと人さしゆびでつまんで、海の方にむけてみた。ラムネのまるいあなから見える波が、きらきらとまぶしく光っている。口をとがらせて、ラムネのあなにむけてヒューとふいてみた。すると、風がとつぜんヒューとふいて、まるで返じをしているみたいだった。

「食べてみようかな。」  
つばさはぼんっと口の中にそのラムネをほうりこんだ。口の中でラムネのあわが、ジュワジュワとはじけた。そのとたんわたしは、海の中でポコポコとうかぶ空気にあわにかこまれていた。シュワシュワと空気がはじける音がする。目をあけていてもいたくないし、

いきもできる。ふしぎだな、と思っていると、目の前に大きなイルカがあらわれた。

「つばさちゃん、ようこそわたしたちの海へ。ここはね、ねがいをかなえる海なんだよ。つばさちゃん、ねがいはなに。」

「わたしは、楽しくわらいたい。わらってみんなとおしゃべりしたり、あそんだりしたい。友だちがほしいの。友だち、できるかな。」

「そんなのかんたんだよ。ぼくについてくればいいよ。さ。どう、ついてくるかい。」

「友だちができるのなら、ついて行きたい。」

イルカはにっこりわらって、

「それじゃあ、出ばつだ。」

と、つばさの手をぐいっとひっぱって、スイーッとおよぎはじめた。

しばらく進むと、子どもクラゲがゆらゆらと波にゆられている。今にもなき出しそうさ。どうしたのかな。お母さんとはぐれてしまったのかな。そんなことを考えていると、イルカが、

「この子をたすけてあげて。」

とやってきた。わたしだって助けてあげたいけれど、どうやって助けていいのかわからない。ちょうどそのとき、ウミガメが近くを通りかかった。どうし

よう。この子のことを聞いてみようかな。

「カメさん。この子どもからきたかわからない。お母さんとはぐれてしまったみたい。」

「ごんねんだけど、分からないな。でも、いっしょにお母さんをさがしてあげるよ。」

そう言っついて来てくれた。

しばらく進むと、ま下から大きなイカが手足をくねくねさせ、まっ黒いすみをプシューッととばしながら上がってきた。

「何かあったのかい。おもしろそうだな。」

大きなイカがそう言った。するとカメは、

「おもしろいことは、たった今おきたよ。見てごらん、みんなのかおを。」

そう言っついて、みんなの顔を指さした。そのとたん、みんなの「あはっはっは」という大きなわらい声がひびいた。みんなの顔は真っ黒けっけ。子どもクラゲもわらっているのが見えて、わたしも楽しい気分で大わらした。まっ黒顔だけど、まあ、いっか。

「ねえ、イカさん。この子どもクラゲのお母さんを知らないかな。」

イカにも聞いてみた。するとイカは、  
「すごいスピードで泳ぎ回っているクラゲを見たよ。」

もしかしてお母さんクラゲかな。よし、ぼくについ

て来て。」

そう言っついて、わたしたちをあん内してくれた。

少し進むと、クジラのしっぽが見えた。大きな体だ。

もしかしてお母さんクラゲを知っているかとも思っつてみんなの大きな声を合わせてさけんでみた。

「クジラさあん。この子どもクラゲのお母さんを見ませんでしたかあ。」

するとクジラは、バシャーンと波を大きくゆらして、大きな体をわたしたちの方にむけた。

強い風がおこり、とばされないようにみんなの手をつないだ。風がおさまり、そうつと目をあげると、大きなクジラが目の前にいて大きな口をあげている。その口の中には、一ぴきのクラゲがいる。クジラは、ニカツとわらつてやさしい顔をした。クジラも、子どもクラゲをさがす手伝いをしていたのだ。お母さんクラゲと子どもクラゲはやつと会えて、とつてもうれしそう。みんなもよろこんでいる。わたしの心は、なんだかぼかぼかしてきた。

今日は楽しかったな。海の友だちもできたから、新しい学校でも楽しいことがまっつてはいるはずだ。いつの間にか、早く二学きがはじまっつてほしいな、とまちどおしくなっつてきた。

【評】ラムネの穴から見える景色や、海の中の動く音や様子を表現豊かに書いてあります。また、女の子の不安な気持ちや、海の中の動物たちの優しさで、前向きな気持ちに変えていく展開に引きつけられます。

(西阿室小 講師 増 たか子)